

## 与那国島の水田立地と稲作技術

——東南アジア島嶼部稲作との関連において——

田 中 耕 司\*

### Traditional Rice Culture on Yonaguni Island ——A Comparison with Rice Culture in the Southeast Asian Archipelago——

Koji TANAKA\*

Yonaguni Island, located at the southwestern end of the Ryukyu Islands, has a humid sub-tropical climate. Information on traditional rice culture on the island prior to the introduction of the so-called *Horai* rice, the new high-yielding varieties bred in Taiwan in the 1930s, was collected by interviewing old farmers, and the characteristics of rice culture were compared with those in the Southeast Asian archipelago.

Wet-rice fields on Yonaguni Island were classified into three groups according to their water and soil conditions: rain-fed (*tinchida*), inundated (*mintā*), and muddy or swampy (*kāda*). The technical components characterizing the rice culture of the island varied widely with the locational conditions. For land preparation, for example, the dominant method in each group was as follows: tilling and levelling by hand only in *kāda*; tilling by wooden hoe and by cattle-trampling, and levelling by harrow in *mintā*; and tilling by plough, preventing seepage by cattle-trampling, and levelling by harrow in *tinchida*. The traditional cropping season of wet rice prior to the adoption of *Horai* rice, with which double cropping of rice was established, differed from that of the mainland of Japan.

Wet rice was generally transplanted in January and February with two-month-old seedlings and harvested in June and July. This cropping season was favoured by the rainfall during the northeast-monsoon season, commencing in October, and could avoid danger of typhoons between July and September. A similar cropping season can be found in Taiwan and the east coast of the Philippines as well as throughout the Ryukyu Islands. The local varieties replaced by the *Horai* rice had the following morphological characters: long culm, long panicle, low tillering-capacity, long awn, black or brown husk, large grains, etc. These characters are considered to resemble those of local varieties grown in the Southeast Asian archipelago, which belong to the so-called *bulu* or *javanica* type.

Traditional rice culture on Yonaguni Island thus appears to have been characterized by components common to rice cultures of the Southeast Asian archipelago, and is consequently thought to have had a close genealogical relation with this region, as indicated by the practice of cattle-trampling and the similarity of rice varieties and cropping season.

#### はじめに

与那国島で営まれてきた伝統的な稲作の姿

\* 京都大学東南アジア研究センター ; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

を、立地に即して記述すること、そして、この地の稲作技術の特徴を東南アジア島嶼部の稲作との比較において考察すること、これが本稿の目的である。

与那国島の稲作が文献にあらわれるのは、

15世紀の朝鮮人漂流者の見聞を記録した『成宗大王実録』巻105の記載が最初である。これによると、与那国島では、主食物に米をもちっぱら用いていたこと、そして、牛に水田を踏ませて苗代をこしらえ、移植稲作を行っていたことなどがうかがえる〔伊波 1927: 50〕。この漂流者たちが与那国島滞在ののちに見聞した南島の他の島々（たとえば、西表島祖納、波照間島、宮古島など）にくらべて、与那国島では稲作の占める位置がより重要であったと推察され、同島の稲作が15世紀まで確実にさかのぼりうる、重要な生業であったことを、この史料から知りうる。

本稿でとりあげる与那国島の稲作技術は、台湾から導入された蓬萊米が同島に普及する昭和10年代前半ごろまでの技術を中心としている。<sup>1)</sup> 蓬萊米の導入によって二期作がはじまるとともに、あい前後して新たな牽引農具などが導入され、与那国島の在来稲作技術はこの時期に大きな変化をとげているので、同島の伝統的な稲作技術を知るためには、ひとまずこの時期までの技術を眺めてみるのが妥当であろうと考えられるからである。

与那国島へは1981年の8月と11月、および1982年の3月の計3回訪れる機会があった。いずれも短期間ではあったが、以下に示す

1) 与那国島へ蓬萊米がいつ導入されたかは明らかでない。大正12,3年ごろ、当時の村長慶田元貞則氏が台中から6斗入りのかますで種籾をもち帰り、採種圃で栽培したのち配布したという聴取例を得たが、このころにはまだ蓬萊米という呼称は与えられていないので、これはおそらく当時台湾に導入されていた内地米あるいはその交配種をもち帰ったものと推定される。蓬萊米という名でこれらの品種が与那国島へ導入されたのは、昭和6年ごろとするのが妥当ではないかと思われる。聴きとりによると、昭和6年、オキモリ請盛正雄氏(与那国尋常高等小学校教員)が蓬萊米を試験的に栽培し、昭和8年には普及しはじめたという。また、昭和9年には石垣稔氏(与那国在勤の沖縄県農業技手)が栽培指導に来島し、その後の試験を経て、昭和10年代はじめには全島に普及するようになったという。

来の稲作技術とその変遷に関する記載は、すべてこの間の観察と聴取調査<sup>2)</sup>にもとづいている。

## I 与那国島の水田立地

### 1. 気候——降水量分布と台風の襲来

与那国島は、年間を通じて温暖多湿で、湿润亜熱帯海洋性気候の特徴を示している。年間の気温較差が小さく、年平均気温が23.4度、最寒月(1月)の月平均気温が17.7度、最暖月(7月)のそれが28.5度<sup>3)</sup>と、年間を通じて稲作に必要な温度条件に恵まれているので、同島の稲作にとって、気温はさして大きな規制要因ではない。

同島の稲作を規制するもっとも重要な気候要因は、台風と降水量分布の変動幅が大きいことの2点である。台風の襲来は強い風雨を伴うために、イネの倒伏や冠水、風送による潮害をもたらし、生育中のイネに直接に甚大な被害をもたらし。表1は、過去25年間(1955~1979年)に、与那国島から300キロメートル以内に入った台風の年平均数を月別に示している。平均して年間に3ないし4回の台風の接近または襲来があり、とくに、7月から9月までの3カ月間には、毎月1度は台風が接近していることを、この記録は示している。従って、この期間の台風被害を回避することが、稲作の安定化のためにもっとも重要な要

2) 聴取調査は主に祖納で行われた。在来農法とその変遷については、東迎仁太郎、久部良勇吉、我那覇尚、東浜永成の各氏から詳しくお話をうかがった。また、近年の稲作技術については、八重山農業改良普及所与那国事務所の仲本光則氏からご教示を受けた。なお、本調査は、昭和56年度文部省科学研究費補助金(一般研究(B)「日本農耕のオーストロネシア的要素」)およびユネスコ東アジア文化研究センターの援助によって行われた。ここに記して謝意を表します。

3) 与那国島測候所「与那国島の気候略表」(1981)による。以下に示す気候データも、すべてこの略表にもとづいている。

表1 与那国島の降水量と台風の接近回数

|                                       | 1月    | 2月    | 3月    | 4月    | 5月    | 6月    | 7月    | 8月    | 9月    | 10月   | 11月   | 12月   | 年      | 統計期間              |
|---------------------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------------------|
| 月間降水量の<br>平均値 (mm)                    | 193.2 | 154.6 | 174.3 | 178.9 | 247.8 | 200.5 | 133.7 | 182.3 | 260.1 | 234.6 | 226.6 | 190.7 | 2377.3 | 1957<br>～<br>1980 |
| 与那国島から<br>300km 以内に<br>入った台風の<br>年平均数 | —     | —     | —     | 0.1   | 0.1   | 0.3   | 0.8   | 1.0   | 0.9   | 0.2   | 0.2   | —     | 3.6    | 1955<br>～<br>1979 |

出所：与那国島測候所「与那国島の気候略表」(1981)

件となる。伝統的なイネの作季がこの台風常襲期間以前に刈取りがおわるように設定されており、一定の作季に従った稲作が行われてきたことは、のちにあらためてふれることとなる。

台風のほかに稲作に大きな影響を与えるのは、年間の降水量分布である。表1に月間降水量の平均値を示したように、与那国島では5月と9月にふたつのピークをもつ降水量分布がみられる。前者は南風モンスーンに由来する降雨で、後者は北東風モンスーンがもたらす降雨である。後述するように、天水田の多い与那国島では、イネの移植がはじまる1月までに、どれだけの水を水田に確保できるかが、その年の稲作の成否を握る鍵となる。表1によれば、各月とも100ミリメートル以上の降水量を記録しているものの、これはあくまで平均の降水量であって、年間の変動は各月とも相当に大きい。とくに、7月から9月の台風期の降雨が少ない年には、その後の秋雨の変動ともあいまって、深刻な水不足や干ばつに見舞われることも少なくなかったといい、本田期間がはじまるまでの降雨の多寡は、与那国島の稲作にとって重大な関心事であった。

その他の気候要因としては、与那国島の季節風の強さをあげることができよう。年間を通じて海洋性気候におおわれるこの島では、南西諸島の他の島々にくらべてさらに風が強く、年間の平均風速が5.9メートル、冬期(11～2月)のそれが約7メートルとなり、月の

うち半ばは日最大風速が10メートル以上となる。このため、委節風によってもたらされる潮害も無視できない。冬期の北東風にさらされる同島北部の台地は、わずかに放牧地として利用されるのみで、この季節風の与える影響も、同島の水田立地をみるうえで見逃せない要因となっている。

## 2. 地形と土壌

与那国島の東部には宇良部岳(231.2メートル)を主峰とする宇良部山系が東北東から西南西へ、そして西部には久部良岳(188メートル)を主峰とする満田原山系が東西に走り、両山系の周縁に数段にわたる段丘が発達して、波状の台地がひろがっている。段丘の発達は両山系の北側で顕著である。

沖積地は、山麓斜面下部、台地や山地間の谷底および海岸部の低地にみられる。宇良部岳北部の田原川沿い低湿地(田原、田原西俣)、同岳北東部の台地間谷底(浦田、南帆安)、西部の山地間谷底(貢原、久座)、満田原山系南部の谷底(満田原、樽舞)、および同島南部の比川や西部の久部良にみられる海岸部低地が主な沖積地で、両山系の山間凹地にも小面積ではあるが沖積地が散在する。

山地は八重山夾炭層と呼ばれる第三紀の砂岩、頁岩で構成され、これが同島の基盤をなしている。山田ら[1973: 313-318]によると、段丘面は琉球石灰岩と呼ばれる隆起さんご石灰岩を基盤に、その上を非固結堆積岩を母材

とする赤褐色土、あるいは第三紀の砂岩、頁岩またはこれらの二次堆積物を母材とする赤黄色土がおおっており、いっぽう沖積地の土壌は、第三紀砂岩、頁岩を母材に、自然的あるいは人為的な水の影響を受けて生成した褐色低地土と灰色低地土、排水不良の低地に生成したグライ土、および排水不良の沼沢地や山間の凹地に湿性植物の遺体が集積して生成した黒泥土の4土壌群に大別されるという。

農耕地が分布するのは、主にこの段丘面上と沖積地である。段丘上の台地や丘陵は、かつては水田に利用されたところもあるが、大部分はサトウキビや甘藷の畑、あるいは牧野として利用されている。また、原野のまま放置されたり、耕作放棄のためにいまでは原野と化しているところも少なくない。沖積地はかつてはすべて水田に利用されてきたが、現在では稲作の相対的な重要度の低下のために、畑に転用されたり、耕作放棄により原野となっているところが多い。比較的排水が良好な山麓斜面下部や谷底の、灰色低地土や褐色低地土の沖積地は、畑に転用され、サトウキビが栽培されている。いっぽう、排水不良の低湿地は、たとえば田原や田原西俣のように、干拓によって畑が造成されたり、あるいは樽舞のように、耕作放棄のために湿原に変わるなど、往時の稲作の様子をうかがうことがいまはまったく不可能となってしまった土地も少なくない。

### 3. 水田の分布と立地

図1は、与那国島の水田分布と代表的な地形断面を示している。図中では、現在なお水田として利用されている地域と、畑に転用ないしは耕作放棄された地域を区分しているが、ここでは、かつて水田として利用されたすべての土地について、ある程度の類型化を試みつつ、その立地を眺めてみることにしよう。

水田が分布するのは、両山系北側の山麓下

部緩斜面、台地・丘陵間の谷底、山間の凹地、および排水不良の低湿地や沼沢地などである。すなわち、水田の分布は前述の沖積土の分布とほぼ対応している。ところで、これら水田を典型的にまとめるためには、上述のような地形のほか、水田の水源あるいは水条件を考慮する必要があるだろう。たとえば、同じ丘陵間の谷底に位置していても、まったく天水にのみ依存する水田もあれば、山麓斜面からの表面流去水の流入する水田、あるいは山麓から湧水を絶えず供給されている水田など、その水条件はさまざま、おおむね、その水条件によって稲作の様子も異なっているからである。

図1の地形断面図に示されている沖積地のうち、田原と樽舞は、水の供給よりもむしろ過剰な水の停滞が問題となる、排水不良の強湿田が分布する地域である。田原が全層グライ土、樽舞が植物遺体を含む黒泥土〔同上論文：324, 325〕と、土壌条件は異なるけれども、いずれも腰や胸までつかる深い泥田をもつ点で、両者は共通している。同様な深田は帆安上原などの山間凹地にも局部的にみられる。与那国島の水田のうち、水条件に恵まれた水田は、図1の地形断面図で示せば、満田原や浦田、南帆安などの丘陵・台地間谷底水田のうち、山脚からの湧水を直接利用できる水田である。なかには、年間を通じて湧水を確保できる水田もあり、干ばつ年でも安定した稲作が可能なこれら水田は、同島ではもっとも恵まれた立地に位置するといえる。

以上の比較的用水の心配のない水田に対して、山腹からの表面流去水や降雨にのみ用水を依存しなければならない水田は、降雨寡少年の干ばつ被害や、常習的な用水不足に悩まねばならない。同じく表面流去水を利用する水田であっても、宇良部岳南部のような山間凹地の水田は、集水面積が相対的に大きいため、用水の確保には恵まれているが、南帆安

や浦田およびその他の谷底水田（貢原、久座など）では、集水面積の相対的な狭小さのために、稲作はより不安定にならざるをえなかった。また、帆安や割目などに分布した台地上の天水田、あるいは前述した谷底水田のうち、表面流去水や湧水をまったく受益できない水田は、降雨の変動に直ちに影響される、もっとも不安定な立地に位置した水田である。そのため、降雨によっていったん確保された用水をどれだけ有効に水田内にとどめておくかが、これら水田の重要な技術的課題となり、後述するように、用水の確保のために多大の労力を払ったのも、こういった水田においてである。天水田の多くは人頭税時代に水田化されたといわれ、与那国島では比較的新しい開墾になる水田である。現在、これら天水田にはまったくイネが栽培されておらず、多くは牧野、サトウキビ畑として利用されている。

図2は宇南帆安の水田分布の変遷を示している。南帆安は南に宇良部山系の山麓部、北

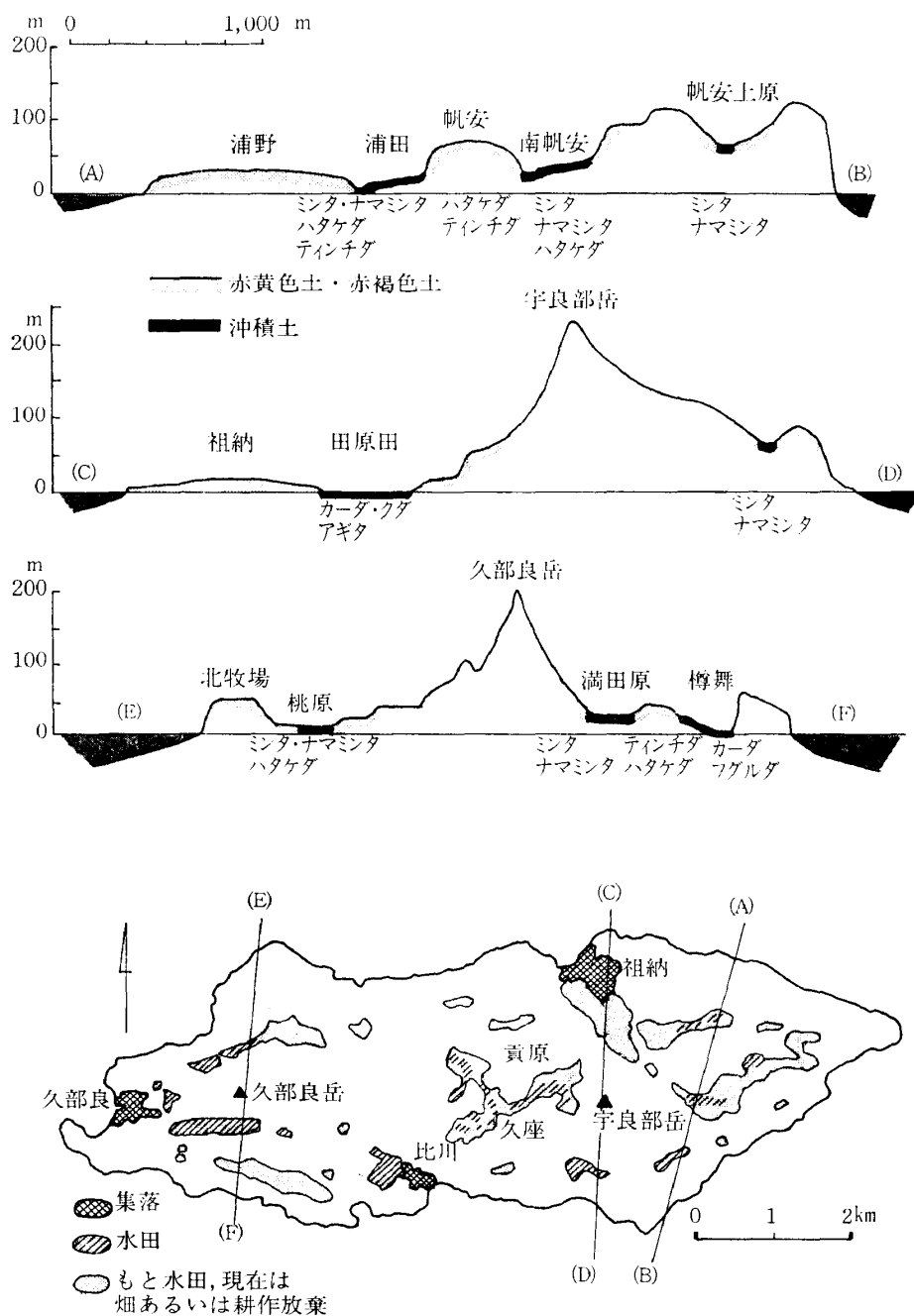


図1 与那国島の地形断面と水田分布  
注) 地形断面の土壌分布は山田ら [1973] による。

に宇帆安の台地の一部を含み、これら両高地に囲まれた谷底からなる。かつては、与那国島のなかでは水田が比較的まとまって大面積に分布した地域である。明治末年ごろには、南帆安のほぼ全域に水田が分布したが、まず台地上の天水田が畑に転用され、続いて山脚

部の棚田が耕作放棄されたという。戦後、サトウキビ栽培が盛んになるにつれて水田はさらに減少し、1970年代には、宇良部岳の麓から湧き出る湧水がかりの水田と、その水を受益できる谷底水田が残るだけとなった。この傾向はその後もさらに続き、調査時点では、湧水がかりの谷底水田のみがわずかに残って、他はすべて畑に転用されていた。いわば、サトウキビが栽培できない立地に水田が残されたともいえるほど、土地利用の大きな変化が近年起きていることが、この図から理解できよう。これを逆にみれば、かつては水条件の相当に困難な立地にも水田が開かれていたことを意味しており、与那国島のかつての水田分布と立地との関係を考えるとき、降水量の多寡と用水確保の難易とが、稲作にとっていかに重要であったかがよく理解できるのではなかろうか。

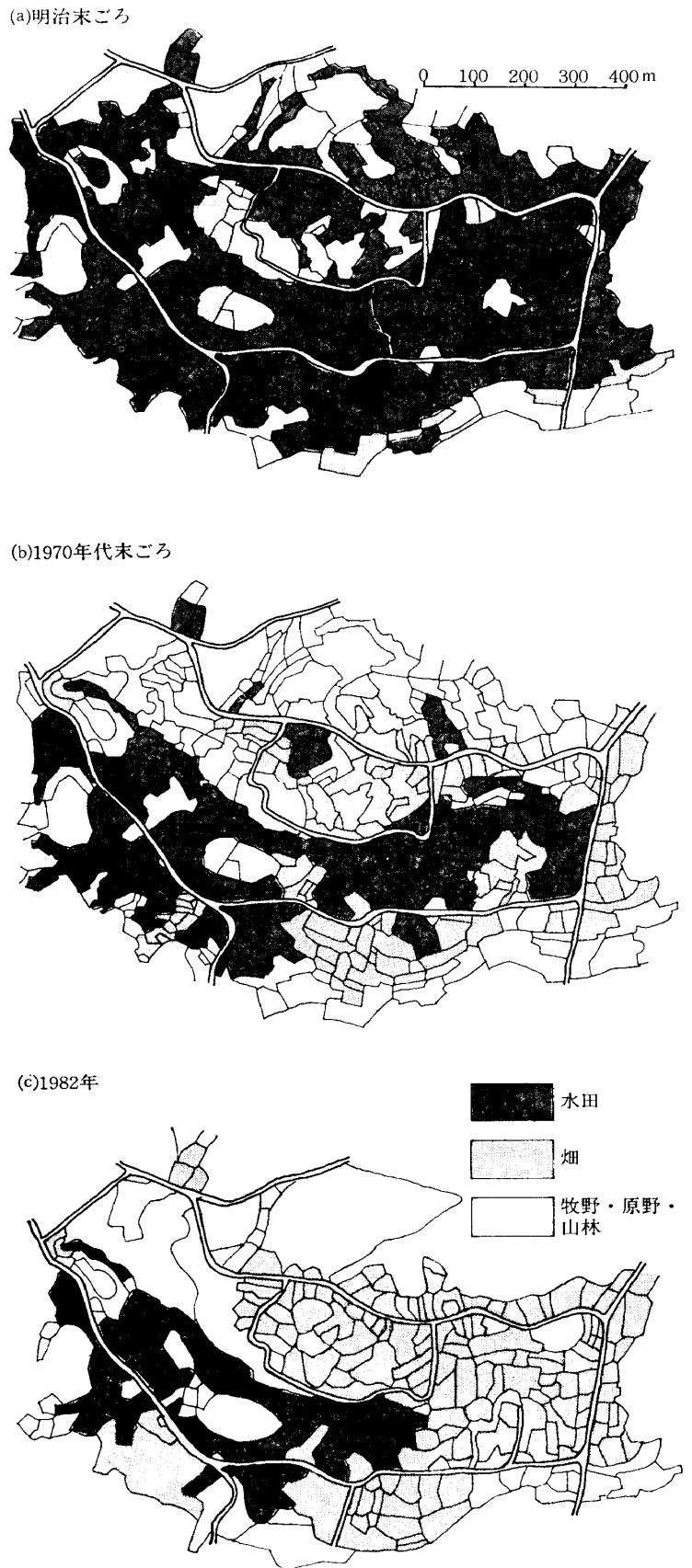
## II 水田の類別とその特徴

### 1. 水条件に応じた水田の類別

前述したようなさまざまな立地に位置する水田が、与那国島では実際にどのように類別されていたかを次にみよう。耕作者自身は、用水を得るための水源や用水の多寡、あるい

図2 宇南帆安の水田分布の変化

注) (a)は明治32年の沖縄県土地整理局の設置とそれに続く測量実施により作成された土地台帳の地目にもとづき作成。(b)は土地台帳変更地目および1977年撮影の航空写真(国土地理院発行)による。(c)は1982年3月現在。



は用水確保後の水もちの難易，さらに水田の泥の深浅など，各水田の水条件にかかわるいくつかの基準によって類別している。すなわち，まず水源の種類によって，次の3種に大きくは類別される。用水を降雨に依存するティンチダ(天水田)，山麓からの湧水を利用するミンタ(水田)，そして排水不良の低湿地で常時滞水しているカーダ(深田)である。それぞれは，さらに用水の多寡，泥の深浅に応じて小区分される。ティンチダは，完全に降雨のみに依存するティンチダと，降雨に加えて山腹からの表面流去水も流れこむハタケダに分けられる。いっぽうミンタは，干ばつ時には湧水が涸れたり，たとえ湧水はあっても十分に配水できないために湛水できなくなるナマミンタ<sup>4)</sup>と，どんな干ばつ時でも水がなくなるミンタに類別される。常時滞水しているカーダは，泥の深さに応じてカーダ(比川ではフグルダともいう)，クダ，アギタ(浅田)に区分される。

ティンチダやハタケダは，山麓下部の緩傾斜地や台地・丘陵上に位置して，降雨以外の水供給がないため，いったん溜まった水を逃さないよう丹念な耕耘を必要とした。とくにティンチダでは，台風(ハヤカゼ)がもたらす夏期の降雨を少しでも多く確保するために，刈取り後から次の田植えまでのあいだ，雨が降るたびに何度も踏耕(後述)を繰り返したという。そのため，いったん湛水させれば，給水量の少ないティンチダがハタケダよりもかえって水もちがよかったともいわれている。水もちのよい水田は，ミンサルタ(スサルは「強い」の意)と呼ばれ，耕盤の赤土が固まって不透水層を形成していたという。いっぽう，水もちの悪い田はウダ(「もっこ」の

4) ナマミンタをミンタよりも水が豊富にある水田という聴取例もあったが，多数例がナマミンタをミンタよりも水の少ない水田としていたので，ここでは後者に従った。

意)と呼ばれ，石混じりの水田にこれが多かったともいう。台地上のティンチダでは，水田内に比較的大きなひび割れや亀裂のあることが多く，その場合には図3に示したようなアブヒキを用いて漏水を防止した。かつては竹筒を用いたが，いまは塩ビパイプを用いている。

湧水が直接流れこむミンタに続く一連の水田をミンタバリといい，これら水田は用水にもっとも恵まれた立地に位置している。ミンタバリのいちばん上の田をカンノタあるいはミンノカンと呼び，この水田は刈取りのときにも排水せず，年間を通じて湛水させて，ミンタバリへの給水源としての役割も果たしていた。カンノタはティンチダやハタケダの分布する地域にもあり，表面流去水のとくに多く流れこむ最奥部の水田がカンノタとなり，下方の田へ水を補給した。天水田地域のカンノタの役割はとくに重要で，幅1メートル，高さ1メートル余ほどの大畦で水田を囲み，刈取り時にも水を切らず，常時水を溜めるように心配りを怠らなかったという。

カーダが泥の深さによって3種類の水田に類別されていることはすでに述べた。もっとも浅いアギタが太ももくらいまでの深さ，クダが腰くらいまで，カーダが胸までつかる底のない水田である。アギタでは耕盤が形成され，水のかけひきが可能であったが，クダやカーダでは土がドロドロで耕盤がなく，水の

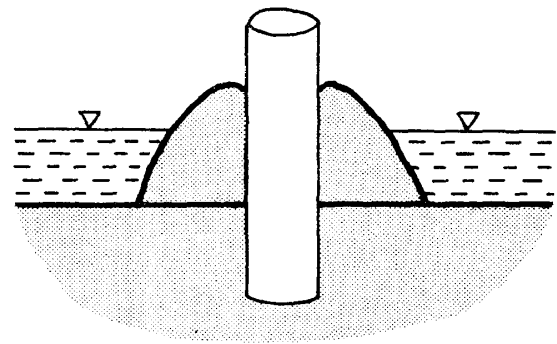


図3 アブヒキ

かけひきはまったく不可能であったという。カーダのなかには、ところどころ落ちこむように深いところがあり、そういう田はフギルタ（抜ける田）とも呼ばれた。畦畔（アブチ）はどの深田にも設けられていたが、カーダではイナマ（矢板）を打ちこみ、そのあいだに木や石を入れ土を盛って、2, 3尺幅の畦を造ったという。常に干ばつに見舞われる危険のあった与那国島の水田では、どんなにきつい干ばつ年であっても必ず一定の収穫が保証されていた低湿地の水田が、耕作の困難さにもかかわらず、価値のある水田であった。祖納では、田原川沿いの低湿地に水田をもつ農家をタブルダモチ（田原田もち）と称して、天水田しか耕作していない農家をうらやましがらせたともいう。

それぞれの立地に位置した水田がどの程度の歴史をもつかは、いまとなっては明らかでない。ただ、ティンチダやハタケダがもっとも新しく開かれた水田であるということは、古老たちの一致した見解であった。与那国島では、1筆ごとに固有名をついた水田があり、こういった水田はティンチダやハタケダに多くに多い。また、固有名をついた大きな区画の水田では、田植えの日にニワトリを供犠したり、牛の頭皮の干物を調理してこれを食する水田があり、これは、人頭税時代に新たに開かれた水田に牛を供犠したことの名残りであるといわれている。水条件に恵まれたミンタやカーダでは、このような固有名をもつ水田が少なく、供犠も行われていない。過去の開田の記憶が固有名や供犠のかたちをとって継承されてきたティンチダやハタケダが、すでにこれらを失ったミンタやカーダよりも新しく開かれた水田ではなからうか、というのが古老たち

の考えである。どちらが古い水田であるかはもちろん即断できないものの、与那国島の水田の歴史と立地との関係を考えるうえで興味深い点ではないかと思われる。

## 2. 字久座の天水田

固有名をもつ天水田の一例を示して、天水田で用水がどのように確保されていたかをみることは、与那国島の水田立地をさらに具体的に知るためばかりでなく、水の豊富なイネの国、と他の島々からうらやまれた与那国島が、実際には、天水田を多くもつ、水不足に悩むイネの国であったことを知るうえでも有効であろう。

図4は、与那国島のほぼ中央部、字久座の丘陵上に位置する天水田、ダママチ付近の水田と用水の流れを示している。ダママチはひろさ約4反5畝のハタケダで、この付近ではニワトリを供犠する唯一の水田であった。昭和30年ごろまで水田として利用されていたといい、現在は、両隣のイリダママチ、ウブシマチと合筆され、サトウキビ畑となっている。この付近の水田は、細い谷間のミンタを除いてすべてハタケダで、完全に降雨だけに依存す

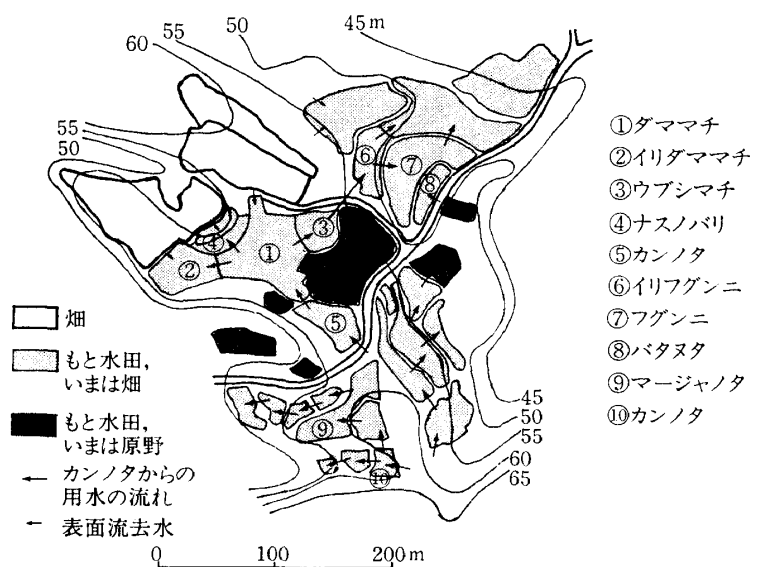


図4 字久座ダママチ付近の水田分布と用水の流れ



るティンチダはなかったという。ダママチ周辺の水田もすべてハタケダである。

ダママチへの用水の補給は、南の山地から流れでる溪流から得られる。この溪流の水源は山腹の湧水であるが、常時水が湧きでているわけではなく、降雨が少なくなると涸れてしまう。この水は、まずいちばん上の田であるマージャンタのカンノタに入れられ、さらにダママチのカンノタで溜められる。水源の水量が十分でなく、渇水時には涸れるので、これらカンノタもハタケダに類別されている。マージャンタのカンノタからは、その西側にひろがるハタケダへ配水され、ダママチのカンノタからは、ダママチ、イリダママチ、ウブシマチ、さらに東のフグンニへと田越しに水が回されていく。ダママチのすぐ下の水田、ナスノバリが苗代として利用され、ダママチ周辺の水田に苗を供給した。ナスノバリはこの付近の水田のなかでもっとも低く、苗代水を得るのに好都合であったからである。苗取り後はナスノバリにもイネが植えられた。

ダママチ周辺の水田では、旧暦8、9月ごろから田の準備がはじまる。これは降雨のたびに行われる牛による踏耕で、天水田での水の確保と漏水防止をねらったものである。本格的な準備はカンノタからの水入れがはじまる旧暦10月からである。まずダママチにカンノタから水が補給される。夏雨が十分に降って、田がすでに濡れているような状態（タンガイ）のときには、ダママチでの水入れ後の踏耕はほぼ10日でおわるが、降雨が少なく、田面にチーハンキ（水がなくなり地面にひび割れができる状態）があらわれているような年には、約1カ月かけて10回ばかり田を踏み続けると漏水が止まらなかったという。上土が十分にこなれて、下土は人が歩けば滑るほどになる（ニーラトゥリル）まで踏耕が続けられた。こうして完全に床固めをし、漏水

を止めないことには、ダママチから下の田へは水を回せなかったという。降雨があれば、周辺の山地や未利用地から各水田に水が流れこむものの、カンノタからの水を補いつつ、ひとつの田の漏水が止まれば次の田へというように、ひとつひとつの水田を入念に耕していかなければならなかった。台風期の降雨、そして旧暦8月からはじまる北東風モンスーンの降雨を少しも逃すまいとする、こうした入念な耕作が行われて、はじめてティンチダやハタケダでも旧暦12月から1月にかけての田植えの季節を迎えることができたのである。

### III 稲作の年間サイクル

#### 1. 作季と作業暦

これまで述べてきた水田立地の多様性にくらべて、与那国島の伝統的なイネの作季は相対的に単純であった。稲作に甚大な被害をもたらす台風の季節を避けることが、同島の稲作にとって最重要の問題であったことはすでに述べたが、これが、水田立地の多様さにかわりなく、全島をほぼ一律の作季のもとにおかした最大の要因であったと考えられる。

図5は、与那国島の伝統的なイネの作季と主な作業の流れを、前述した主要な水田類型ごとに示したものである。比較のために同島で現在行われている二期作の作季<sup>5)</sup>をあわせて示し、また、表1に示した月間降水量および台風接近回数<sup>5)</sup>の月間平均値もあらためて図示して各作季と対照できるようにした。なお、伝統的な稲作の作業暦は旧暦で記憶されているので、本章での作業時期などもすべて旧暦で記すこととした。

6月に刈取りがおわり、7月の盆が明けると、すぐに次の稲作の1年のサイクルがはじまる。まず、本田の荒起こし、客土などが行

5) 八重山農業改良普及所普及資料による。現在の沖縄県奨励品種トヨニシキの二期作例を示す。

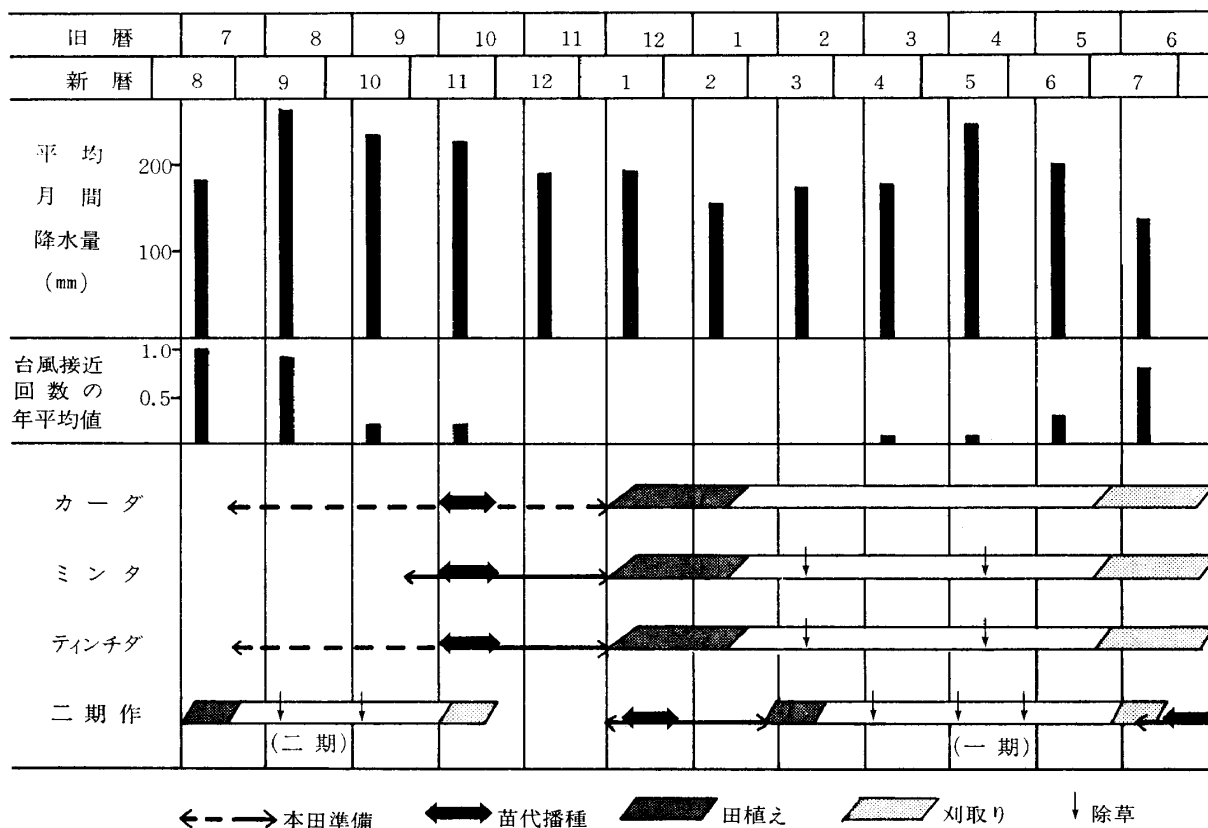


図5 与那国島の伝統的稲作と二期作の作季

われる。そして、10月の苗代播種までのあいだ、本田は何度も耕され、各水田の条件に応じて地力の維持、水の確保、あるいは雑草の抑制などがはかられる。8月、9月の秋雨は本田の準備に必要な水をもたらし、10月に入ると苗代播種や本格的な本田準備作業がはじまる。苗代期間は60日前後で、12月に入ると田植えとなる。田植えは遅くとも1月の雨水のころまでに終えたという。田植えのあとは除草である。移植後約1カ月に最初の除草、そして出穂前に2回目をするのが標準だったといわれているが、カーダなどではまったく除草しないことも多かったという。本田期間中には4回のムヌン（物忌み）が行われ、虫害や風害の起こらないよう祈願される。こうして、干ばつや大きな虫害、台風の襲来などがなければ、無事に5月から6月の収穫期を迎えることができる。以上のように、稲作の

年間のサイクルはほぼ1年間を通じて切れ目なく続いていった。

イネの作季は、播種が10、11月、田植えが12、1月、刈取りが5、6月となり、苗代期間が約60日、本田期間が120～150日と、いずれも長期間にわたっている。当時用いられた在来品種は、<sup>ハネヂクル</sup>羽地黒、<sup>ナゴハツカ</sup>名護穂赤、マーノマイ、イネマイ、ウチノマイ、ツーマイ、ムティマイ（糯米）などであったが、いずれの品種も生育期間に大差はなく、田植えが少々遅れても、6月には収穫できたという。

イネの作季には水田立地による差はみられないものの、稲作の各作業は立地の違いに大きく影響されている。そこで、以下では、水田類型による違いに注目しつつ、各作業についてさらに詳しくみていくこととしよう。

## 2. 本田準備

ティンチダやハタケダでは7, 8月に野原や荒れ地の土を客土する。バーグと呼ばれる組織で共同作業され, 30戸くらいの水田をすべておわるのに約1カ月かかったという。客土は毎年行われ, 草の生えた土を根や草もいっしょに削りとり, ふたりが組んでもっこで土を運び入れた。バーグが行われたのは戦後の一時期までで, その後は個人で行うようになったという。ミンタやカーダにはユウナ(オオハマボウ)やアグ(アコウ), タビチ(オオバキ), ナンチ(クワ)などの葉や枝を緑肥として入れた。戦後はティンチダやハタケダへも緑肥を入れるようになったという。<sup>6)</sup> 蓬萊米の導入後, 化学肥料も使われるようになったが, 戦後までの本田施肥は客土や緑肥施用が中心であった。

本田の最初の耕起(ターカシ)がはじまるのは7月の盆明けからである。ティンチダやハタケダでは, 降雨をまって水田用の在来犁(ターカシダマ)で耕起がはじまる。ターカシダマは犁鋤のない枠型長床犁[下田ら 1979: 58, 59]で, 大正初年にクラブと呼ばれる台湾犁が導入されるまで使用された。続いて昭和7, 8年ごろから12, 3年ごろにかけて磯野式短床犁が導入されるようになり, 耕起はクラブに代わって磯野犁で行われるようになった。

荒起こしのあとは, すでに述べたように, 牛(ウチ)を使って踏耕(タンミ)が行われる。牧場(マーティ)から牝牛(ナーミャ)を集めてき, 5, 6頭を横に並ばせ, 首に縄を回して胴がすりあう程度につなぎ, そのいちばん外側に牡牛(ビギウチ)または馬をつなぎ, 水田内をぐるぐる回りながら水田を踏みこませた。いちばん外側の牛をカネウチ, 内側の牛

をトーウチといい, 外側になるほど足の速い牛をおいて, 人を中心に反時計方向へ回転させ, トーウチの手綱をあやつりながら作業した。とくに畦際の踏みこみを丹念にする必要があり, カネウチが畦から踏み外さないよう注意しなければならなかったという。天水田ではタンミは降雨のたびに行われ, タンミをすればするほどイネの収量はよくなったといわれている。タンミのたびに必ずイチムタセも行われた。これは, 1辺15~20センチメートル四方, 長さ約1メートル半の四角柱に整形した石を牡牛にひかせる作業で, 砕土と鎮圧のために行われた。通常の水田ではタンミは3回程度行われたが, 漏水のひどい水田では水が止まるまで何度も繰り返されたことはすでに述べたとおりである。

漏水が止まると, 田植えのための整地作業がはじまる。耕耘には耙(マーグ)が用いられ, これで数回耕したのち均平(ターミダカナシ)が行われる。均平には約3メートルの長さに切った径3, 4センチメートルの竹を20数本束ね, 縄やトウで縛ったものや, 長い角材が用いられ, いずれも牛に牽引させた。また, ドニモテマーグと呼ばれる, 歯の幅がひろく歯と歯の間隔が狭い木製の耙や, ツーツァと呼ばれる牽引用の板も均平に用いられたという。昭和12, 3年ごろに台湾からクルバシャが, そしてほぼ同じころに石垣島から水牛が導入されて, 耕耘にはクルバシャがもっぱら用いられるようになった。クルバシャは現在もなお続けて利用されている。

ミンタやナマミンタでの本田準備は, 刈取り後の刈株を埋めるための荒起こしが最初の作業である。水が豊富にあり, 泥の深いミンタでは木鍬(キーパンガエ)が用いられた。大正年間には鉄製鍬(カニパンガエ)が導入されたので, キーパンガエに代わってこれを用いるようになったという。この鍬耕は, 最初の荒起こしののち整地にとりかかるまで,

6) 戦前からティンチダやハタケダでも客土とともに緑肥を施用したという聴取例があるので, 緑肥施用はすべての種類の水田で行われていたとも考えられる。

2, 3 回行われた。

いっぽう、水のそれほど多くないミンタやナマミンタでは、荒起こしをせずに、直接牛を入れてタンミをさせ、刈株や雑草、さらに緑肥を踏みこませた。ここでもタンミと同時にイチムタセが行われた。タンミは天水田のようにたびたび行われなかったが、雑草が生えてくると再びタンミを行なったので、整地にとりかかるとまで数回繰り返されたという。田植え前の整地作業は、前述の天水田の場合と同様で、マングで耕耘し、そのあとターミダカナシを行なった。

磯野犁やクルバシャが導入されてからは、ミンタやナマミンタの本田準備には、もっぱ

ら両農具を用いるようになったという。タンミをせずに、磯野犁で荒起こしとその後の耕起を行い、砕土や整地にはクルバシャを用い、最後に長い角材をひかせて均平するようになった。前章で字南帆安の例を示したように、与那国島で現在イネが栽培されている水田のほとんどがミンタやナマミンタであるので、短床犁とクルバシャを用いるこの本田準備方式が実際に行われているのを、いまもみることが出来る。

深田のうちでも比較的泥の浅いアギタでは、7月、刈取り後のマタビエ（ひこばえ）がでる前に最初の耕起を行なった。土がやわらかいので、キーパンガエで刈株や雑草を埋

表2 本田準備の作業体系

|                                 | 水田の種類                                    | 作     | 業                               | 体     | 系                           |                          |
|---------------------------------|--|-------|---------------------------------|-------|-----------------------------|--------------------------|
| 蓬<br>萊<br>米<br>導<br>入<br>以<br>前 | カ ー<br>ク   ダ<br>ダ                        | ----- | 刈株・雑草の埋めこみ (手)                  | ----- | 均 平<br>(手で板を<br>押す)         |                          |
|                                 | ア   ギ<br>タ                               | ----- | 刈株の埋めこみ<br>(キーパンガエ /<br>カニパンガエ) | ----- | 耕 耘<br>(キーパンガエ /<br>カニパンガエ) | 均 平<br>(手で板を<br>押す)      |
|                                 | ミ   ン<br>タ                               | ----- | 荒起こし<br>(キーパンガエ /<br>カニパンガエ)    | ----- | 耕 耘<br>(マング・イチム<br>タセ)      | 均 平<br>(牽引農具)            |
|                                 | ナマ<br>ミ<br>ン<br>タ                        | ----- | 刈株の踏みこみ<br>(タンミ・イチム<br>タセ)      | ----- | 耕 耘<br>(マング・イチム<br>タセ)      | 均 平<br>(牽引農具)            |
|                                 | ハ   タ<br>ケ<br>ダ<br>テ<br>ィ<br>ン<br>チ<br>ダ | ----- | 荒起こし (ダマ)                       | ----- | 漏水防止<br>(タンミ・イチム<br>タセ)     | 耕 耘<br>(マング・イチム<br>タセ)   |
| 蓬<br>萊<br>米<br>導<br>入<br>以<br>後 | カ ー<br>ク   ダ<br>ダ                        | ----- | 刈株・雑草の埋めこみ (手)                  | ----- | 均 平<br>(手で板を<br>押す)         |                          |
|                                 | ア   ギ<br>タ                               | ----- | 刈株の埋めこみ<br>(カニパンガエ)             | ----- | 耕 耘<br>(カニパンガエ)             | 均 平<br>(手で板を<br>押す)      |
|                                 | ミ   ン<br>タ                               | ----- | 荒起こし<br>(短床犁)                   | ----- | 耕 耘<br>(クルバシャ・<br>イチムタセ)    | 均 平<br>(牽引農具)            |
|                                 | ナマ<br>ミ<br>ン<br>タ                        | ----- |                                 | ----- | -----                       | -----                    |
|                                 | ハ   タ<br>ケ<br>ダ<br>テ<br>ィ<br>ン<br>チ<br>ダ | ----- | 荒起こし<br>(短床犁)                   | ----- | 漏水防止<br>(タンミ・イチム<br>タセ)     | 耕 耘<br>(クルバシャ・<br>イチムタセ) |

めこむ（アラニ）のが主な作業であったという。いっぽう、カーダやクダでもほぼ同じ時期に耕しはじめるが、その作業には農具を使わず、手で刈株を埋め、土の表面を掻き回して（ターキン）雑草の発生を抑えるだけであった。アギタでもカーダでもひと月くらいすれば雑草がでてくるので、田植えがはじまるまでほぼひと月に1回、多いときにはさらに間隔を短くして耕したという。こうして頻繁に耕すことが、雑草を抑制し、地力を維持するうえで効果があったともいわれている。また、このような深田では、田植えの直前に長い板（ビュニイタ）を手で押すだけで、田面は簡単にたいらになったという。この均平作業はふたり一組で行われた。

以上のように、本田準備の方法は水田立地の違いに大きく影響されるため、その一連の作業の流れは立地に依拠してさまざまであった。各立地の作業を対照するのに便利なように、その作業体系を表2に簡単にまとめておいたので参照されたい。

### 3. 苗代

天水田やミンタでは、水がかりがよく土の肥えた水田が苗代（ナース）として選ばれる。湧水が直接流れこむミンタでは、降雨の際に浸水する恐れがあるため、用水は常に得られるにもかかわらず苗代を作らなかった。むしろ、そのミンタから水をひく水田に苗代をこしらえたという。天水田では、カンノタから用水をひける水田、あるいは比較的早く水が溜まる水田に苗代をこしらえた。深田では苗代ができないため、アギタ周辺の比較的浅い水田を苗代田とした。たとえば祖納南部の田原田の場合、祖納部落と田原田が接する、部落東南部の周縁にドゥニマチナスと呼ばれる苗代田があった。ドゥニマチナスはアギタあるいはハタケダに類別される水田で、下の田原田から汲みあげた水が苗代水として利用さ

れた。苗代は各戸が個別に作り、共同苗代はなかったという。

苗代ごしらえにもタンミが行われた。これはナースンミと呼ばれ、漏水防止や緑肥の踏みこみのために、どの苗代でも行われたという。苗代の肥料には、前述した本田の肥料と同様、大きくやわらかい葉をもつ木の枝葉を緑肥として入れたり、数年に1度野原の土が客土された。また、本田には用いられなかったが、牛糞や豚糞を代かき前に施用することもあった。苗代はナースンミののち、数回犁や耙で耕して整地される。短冊状に区切らない平畦の水苗代で、本田1反歩に対して15坪前後の苗代が準備された。

種播きの約1週間前から種籾の準備がはじまる。種籾をクバの葉に包んで、一昼夜から4、5日真水に浸種し、その後よく水を切って屋内でわらをかぶせて催芽（オクミー）させた。苗代には、最後の代かき後、まだ土が濁っている状態のときに、この催芽籾が播種される。こうすれば、種籾が適当な深さに落ち着き、覆土もされて発芽がよく揃ったという。播種量は本田1反歩あたり4升から5升、苗代1坪あたり約3、4合を目安とした。播種時には、ススキの茎などの目印を苗代に立て、区切りとした。このひと区切りをトゥウンチと呼び、トゥウンチで1反の本田に十分に植ええられる苗が確保できたという。

苗代期間中は、初期の鳥害防除と水管理に注意が払われる。播種後、苗代には縄を張り、クバの葉などを吊したり、松明やランプをともしてカモやバンの飛来を防いだという。また、水管理は、播種後2日間は2寸ほどの深さに水を溜め、その後落水して芽干しし、再び水を入れて、播種後55～65日で移植されるまで湛水した。苗代期間中の水の確保はどの苗代でも重要な作業であったが、とくに田原田のドゥニマチナスでは、苗代水を供給するのに多大の労力を要した。下のカーダあるい

はアギタから、クバの葉で作った大きな杓（クバヌハウブルあるいはミンアギウブル）で汲みあげられた水は、シッチと呼ばれる溝に入れて苗代に供給された。さらに上の苗代へ供給しなければならないときには、下の苗代にミンアギウブルと呼ばれる水溜めをこしらえ、そこからさらにミンアギウブルで上の苗代のシッチに水を汲みあげたという。水の過剰のために、本田ではむしろ用水を心配する必要のなかったカーダやアギタの稲作も、苗代期間には、苗代水を確保するのにずいぶん苦勞をしなければならなかった。

与那国島では、苗代に供される水田は毎年ほぼ決まっていたが、苗代にのみ利用される水田、いわゆる通し苗代はなく、苗取り後、すべての苗代にイネが植えられた。ドゥニマチナスのような深田用の苗代田は、深田で収穫したイネを干す場所にも使われるので、いちばん遅く田植えが行われ、逆に稲刈りはいちばん早かったという。

#### 4. 田植え

早朝5時ごろから苗代へでかけ、松明をつけながら苗取り（ナイトゥイ）がはじまる。苗取りはもともと女の仕事であったが、ときには男も手伝ったという。苗は両手で抜きとられ、片手ふたつがいっぱいになると、1把（トゥタバエ）にし、ティバラと呼ばれるイネわらで結束した。トゥタバエが三つでトゥツカとなり、このトゥツカを10集めて1束（トゥマルティ）とした。トゥマルティは30タバエからなり、マルンナと呼ばれるカヤのわらや、バランナと呼ばれるイネわらの穂先部分を結んだ結束用わらで束ねられた。1反歩の水田を植えるのに10マルティ、すなわち300タバエを要したという。本田へは4~6マルティを天秤棒にかついたり、馬の鞍に振分け荷物にして運んだ。

田植え（タービルあるいはタービ）は午前

7、8時ごろにはじまる。植えるのは男の仕事である。ドゥイマル（ユイマール、結い）で行われ、参加者には握り飯、汁物、酒が振る舞われた。田植えは12月から1月、大寒から雨水にかけて行われるので、亜熱帯性気候とはいえ水につかる仕事は寒かったという。1時間ほど作業をしては酒を飲み、身体を温かくしてまた田植えにとりかかった。ドゥイマルに対しては同じ仕事を返すのが習慣であった。田原田のような深田では、タブルダモチのあいだでお互いにドゥイマルをしたという。

苗は育苗期間約60日の熟苗で、40センチメートルくらいの丈があった。葉の先端部を切ることはせず、そのままひと株3本植え前後で植えたという。天水田では用水確保のためにできるだけ深く湛水していたし、いっぽう深田では泥が深かったので、大苗でなければ植えられなかったという。<sup>7)</sup>

蓬萊米の導入とともに、除草機の導入が奨励されるようになり、そのとき正条植えも奨められたが、それまではほぼ7、8寸角を目安にして、ひとりがイツモト（5株）もちで、後退しながら植えていった。また、ミンタの土の肥えた田やカーダでは1尺角くらいで疎植された。植えた苗が抜けないように、風が強いときには右手斜めうしろから、あるいは右の手甲に風を受けるように田に入ったという。田植え上手を先頭に、植え手は彼に従っていった。風のないときには、図6に示したようなブイマギ（あるいはイロハ植えとも呼ばれた）という移植法が行われることもあった。植え手がイツモトを植えおわると、互いに「イヤハー」「イヤヒー」とかけ声を交わし

7) 与那国島に蓬萊米が導入された当初は、水や泥の浅い水田にのみ栽培されたという。その後の栽培試験の結果、育苗期間50日くらいの大苗を植えても収量が低下しないことが明らかにされ、昭和12、3年ごろから全般的にひろまるようになった。



だしてからマルキに結束した。深田ではかつては運搬用にくり舟も用いたという。

刈り取られたイネは、マルキのまま野原や屋敷近くの空地へ運び、乾燥させた。イネの乾燥は女の仕事である。前日のうちに野原へ運ばれたマルキを翌日ほどき、タバエをひとつひとつ扇のようにひろげて、まる1日乾燥した。乾燥のおわったイネは、15タバエずつ、すなわちイシカに束ねられ、これを稲叢（シラ）に仮積みした。このシラは脱穀までの一時的なもので、風通しがよく運搬に便利な場所に作られた。竹を編んだ枠の上にバショウの葉を敷き、その上にイシカを積みあげてシラにしたという。年を越して自家保有米とするイネや種籾用のイネは、屋敷地内でタバエにばらしたうえ、タネマイシラに積みあげ保存された。石を四隅および各辺の中央部に据え、その上に木をわたして竹で編んだ枠をおき、さらにイネわらを敷いてシラの土台とした。そして、まず保有米を積みあげ、その上に翌年の種籾用のイネを積み、雨除けにクバの葉を最頂部にかぶせればタネマイシラができあがった。10月には翌年の稲作のための種子取り（タナンドゥリ）が行われるので、種籾用のイネをシラの最上部に保存しておくことと便利であったという。シラ作りはすべて男の仕事である。

稲刈りがすべておわったのち、仮積みしたシラをばらして屋敷地へ運び、脱穀・調製が行われる。脱穀・調製は女の仕事である。脱穀には、大正のはじめごろまでタキンダーと呼ばれる、細竹で作った扱きはしが使われたが、その後は千歯扱ぎが使われるようになった。タキンダーを使った脱穀の場合、上手な人なら午前中に8マルキのイネを脱穀できたという。脱穀された籾は、天日乾燥ののち、カティカバと呼ばれる芒取り用の杵で芒が取り除かれ、その後、キウチ（木臼）とカバ（杵）で籾すり、およびザニウチとザニカバで精米

された。

稲作の年間サイクルのしめくくりとして、当時の在来品種の収量がどの程度であったかを最後に検討しておこう。聴取例では、当時の収量は1筆あたりの籾重量（斤）や、あるいは、たとえば100マルキとれる田をトゥガラダと呼ぶように、収穫されたマルキ数で記憶されていることが多かった。そこで、100マルキの平均的な籾重量を1,500~1,600斤、そして在来品種の籾すり歩合を50パーセントとして、各事例を反あたりの玄米収量に換算すると、128~230キログラムという収量になり、平均収量（6事例）は165キログラムとなった。聴取事例はいずれも当時の精農家の収量であるので、この数字より少し低い収量が当時の平均的な収量であったと考えられよう。蓬萊米が導入されて、収量は倍増したと一般にいわれている。与那国島では、天水田で蓬萊米の半分の収量、ミンタで3分の2の収量であったという聴取例もあり、反あたり140キログラム前後の収量が、当時の平均的な収量ではなかったかと推定される。<sup>8)</sup> いずれにせよ、当時の与那国島では、これまで述べてきたように、年間を通じて稲作のための作業が切れ目なく続き、多大の労働が投下されていたにもかかわらず、収量水準は非常に低かったといえよう。

#### IV 東南アジア島嶼部稲作との関連

周囲約27.5キロメートル、面積約31.5平方キロメートルの与那国島はけっして大きな島ではない。しかし、小さいながらもこの島内

8) 与那国町役場調べの昭和55年度水稻生産実績によると、一期作の反あたり収量が288キログラム、二期作が112キログラム、両作季をこみにした平均収量が281キログラムである。また、八重山農業改良普及所与那国事務所によると、過去5年間の平均収量が258キログラムであるので、当時の平均収量の推定はもう少し低く見積もる必要があるかもしれない。



に多様な水田立地が存在し、それぞれに対応した稲作が営まれていたことをこれまでに述べてきた。ここでは、蓬萊米導入以前の稲作の特徴を本土の稲作との比較においてとらえ、さらに東南アジア島嶼部の稲作との関連において考察することとする。

本土の稲作と比較して、与那国島の稲作は次のような点で異なる特徴を有していた。すなわち、①作季が新暦1、2月から6、7月までで、本土の作季とはまったく異なる、②耕耘法における犁の役割が低く、本土にはみられない踏耕が行われる、③水稻品種の生育期間が長い、④収量水準が非常に低い、などである。以上のような特徴のほかに、景観的にみた現在の水田の姿も、本土のそれとはずいぶん異なっていたように思える。かつては天水田が開かれていた丘陵地や台地上の耕地の赤土のひろがり、亜熱帯樹林に囲まれた山間の谷地田などは、本土にはみられない水田景観といえよう。前述した本土稲作との相違点や景観的にみた水田の印象は、与那国島の稲作が本土の稲作よりも、むしろ南方の東南アジア島嶼部の稲作に似通ったものではないかという考えを強く抱かせるのである。

それでは、東南アジア島嶼部の稲作にはどのような特徴が認められるのであろう。筆者はこの地域に共通する特徴として次のような点を指摘したい。まず稲作の景観的な特徴としては、比較的限られた地域内で水条件において連続的に遷移する立地が混在し、そこに焼畑—常畑—天水田—低湿地水田というように多様な耕地が開かれ、さまざまなタイプの稲作が共存して営まれているのが、東南アジア島嶼部稲作の特徴である。大陸部に比べて箱庭的ともいえる島嶼部の地理的環境が、小地域内での多様な稲作の共存を必然化せしめたともいえよう。そして、技術的な特徴としては、年間の降水量分布に対応した伝統的作季の多様性、踏耕、櫛形鋤などの耕地準備

のためのこの地域独特の方法と農具の存在、ブル系品種と総称される、非感光性で生育期間が長い、大粒・長芒の品種群の栽培、あるいは稲作儀礼における牛・豚の供犠などを指摘できよう。

焼畑や常畑でのオカボ栽培の伝統を与那国島でみることはできなかったけれども、天水田から低湿地水田に至る連続した水条件のもとでさまざまな稲作作業が共存していたことは、すでに述べたとおりである。このような与那国島の水田立地と対比するとき、ジャワ島の火山性台地を開析した谷底の谷地田や、それに続く緩斜面上のゆるやかな棚田水田、あるいはスラウェシ島ボネ地方の隆起石灰岩台地の天水田などが容易に想起され、それぞれ、与那国島のミンタやハタケダ、あるいはティンチダにたいへん似通っているように思える。与那国島の稲作が東南アジア島嶼部の稲作に関連するのではないかという筆者の印象は、このような水田景観の相似にもとづく印象にすぎないけれども、以下にとりあげるようなイネの作季や水田耕作法の特徴にまで考えを及ぼしていくならば、その印象もあながち的はずれでないのではなかろうかと思えてくるのである。

東南アジア島嶼部のイネの作季は、各島々の大陸側と大洋側、言い換えれば脊梁山脈の西側と東側で異なる場合が多い。これは、モンスーン由来の降雨の年間分布パターンが島の両側で異なることによる。たとえば、フィリピンのルソン島のオカボ栽培の場合、南西モンスーンによる夏雨が卓越する西岸型気候区（脊梁山脈西側）では、6月から10月が主要な作季であるのに対して、北東モンスーンによる冬雨が卓越する東岸型気候区（脊梁山脈東側）では、10月から1月に降雨が比較的集中して、10月から2月が作季となる [古川1982:55]。また、スラウェシ島南部の南スラウェシ州の場合、北西モンスーンが卓越して

イネの作季が12月から5月ごろとなる西岸部と、南東モンスーンが卓越して作季が3月から8月ごろとなる東岸部とは、際立った対照をなしている。大洋と大陸に挟まれた島嶼の地理的位置は、このようにひとつの島内に複数の対照的なイネの作季を成立させる気候条件をもたらす点が大きな特色である。このことは、大陸部の稲作がモンスーンの交替による明確な乾季と雨季とによって一律に規定されているのと好対照をなすといえよう。

バイモーダルな降雨分布を示し、明確な乾季や雨季をもたない与那国島の気候条件は、こういった意味から、東南アジア島嶼部の気候条件に通じる特徴を示している。すなわち、その降雨パターンは、島嶼部の主要な島々にみられる脊梁山脈の東西両側の降雨パターンが重なったもので、なかでも、北東モンスーンによる冬雨が卓越する北半球の島々の東岸型の降雨パターンを示すものであると位置づけられよう。そして、台風期と冬雨の卓越というふたつの条件によって成立した与那国島の伝統的なイネの作季は、東南アジア島嶼部というひろい枠組のなかでとらえるとき、同様な条件によって成立する、台湾やフィリピン東岸部の伝統的なイネの作季とともに、島嶼型稲作の北半球東岸型稲作とでも呼べるひとつのグループにまとめることも可能ではないかと考えられる。

次に、東南アジアの島嶼部の稲作と関連して注目したいのは、与那国島の伝統的な水田耕作法であった踏耕の問題である。踏耕については、すでにこの地域との関連について論じている報告もあるので、<sup>9)</sup> 先に述べたわたしの印象をもう少し補強する材料を示すという立場から、簡単にそのことにふれるにとどめておこう。

与那国島で行われた踏耕は、天水田での漏水防止、ミンタでの土壌の攪拌耕、および緑肥の踏みこみという三つの役割をもっていた

が、同様な役割を果たす踏耕は東南アジアの島嶼部でひろく行われている。たとえば、山間盆地の水田の耕耘を主な目的とした踏耕、低湿地水田の雑草の踏みこみのための踏耕、あるいは石灰岩台地水田での漏水防止のための踏耕などである。これらの踏耕は、その機能においても、また犁耕に先行する耕耘法であったと推定される点でも、与那国島の踏耕ときわめて共通している点が多いといえる [田中ら 1982: 24-26]。そして、踏耕の行われた地域が、ひろく、東南アジア島嶼部から、与那国島を経て南西諸島を北上し、遠くは九州南端にまで及んでいたこと [同上論文: 26-31] を想起するとき、与那国島の稲作が系譜的にも東南アジア島嶼部の稲作と強く結びついていたのではないかという思いを強くするのである。

いまひとつ島嶼部の稲作との関連で指摘したい点は、与那国島のイネ品種の問題である。前章で記したように、蓬萊米導入以前の在来品種は、羽地黒、名護穂赤、マーノマイ、イネマイ、ウチノマイ、ツーマイ、ムティマイなどと呼ばれる品種である。このうち、前二者はその名の示すように、八重山地方へ新しく導入された品種である。また、他の品種のうちいくつかは、与那国島だけでなく八重山の島々でも栽培されており [安溪 1978: 51]、与那国島のイネ品種は八重山地方と大きく異なるものではなかったようである。聴取によると、与那国島の品種はいずれも草丈が高く、長芒、長穂の形態的特徴を有していたといわれる。品種が現存しないためにその形質を詳しく検討できないものの、聴取による形態的

9) 国分 [1970: 162] は、踏耕を「日本内地系の技術と異なるもの」とし、これを「島型稲作」と呼称して南西諸島に「弥生系の技術とは異なる南方系の技術が分布」していたことを示唆している。また、小林 [1982] は、主として文献資料により、南西諸島の多数の踏耕事例をあげており、踏耕が水田保水に重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。

な特徴は、東南アジア島嶼部にひろく栽培されるブルと総称される品種群に近い外部形態を示していたのではないかと推定される。

安溪 [同上論文：57-59] は、現存する八重山在来の5品種の形質を分析し、そのうち4品種がフェノール反応で(+)を示したことから、この地方の品種が「沖縄の在来イネのなかでは主流というよりはむしろ特殊な形質をもっていた」と述べ、沖縄のイネのなかで特異な一群を作ること示唆している。与那国島のイネがこれら八重山の在来品種と同じ形質を示すか否かはいまとなっては不明であるが、少なくともフェノール反応(+)のイネと(-)のイネとが混在していたことは、この結果から十分に推測されるところである。

ところで、フェノール反応で(+)の形質は、前述した、与那国島の在来イネが外部形態的にみてブル系統の品種群に近似するという筆者の推定と相反する形質である。この形質は、長粒、無芒のインディカ系統のイネにみられる形質で、ブル系統の品種は、ジャポニカ品種群と同様、(-)の反応を示すからである。しかし、(+)の反応を示した八重山在来の品種も、その外部形態に関しては、草丈が高く、長芒で籾や芒が着色している [同上論文：60] というように、インディカ品種群よりも、現在東南アジア島嶼部で栽培されているブル系統の品種群によく似た特徴を有していた点は考慮される必要がある。

古川 [1982：69-71] は、ルソン島における在来イネのフェノール反応を調べ、南ルソンの陸稲、北ルソンの焼畑陸稲、山岳地帯棚田の水稲に(-)の反応を示す、「ジャポニカ的」あるいはブル系統の品種が多いことを報告している。従って、与那国島の在来イネに関しては、フェノール反応においては(+)と(-)の両者が共存していたと推定されるものの、外部形態においてはブル系統の品種群の特徴をもつイネが優占しており、その特徴は、前述

のルソン島のイネなどとも関連していたのではなかろうかと考えられるのである。与那国島のみならず八重山地方全体の品種群を、いま明確にブル系統の品種群として位置づけるには証拠が不十分であるけれども、東南アジア島嶼部にひろく分布する焼畑陸稲やブル系水稻との関連が今後明らかにされるならば、「熱帯島型品種群」 [岡 1953：40-42] と呼ばれるグループに属する品種群として、これを位置づけるのも可能ではないかと考えられる。

## おわりに

以上、東南アジア島嶼部の稲作と関連して、重要と考えられる2,3の問題を指摘して、与那国島の伝統的稲作の特徴を述べた。

このほかにも、収穫・調製用農具や稲作儀礼などで東南アジア島嶼部稲作との関連が語られようが、これらについては八重山地方を中心にすでに民俗学・民族学分野で多くの蓄積があるので、本稿では稲作の自然立地や技術的側面を述べて、この地域の稲作と南方との関連を探ってみようとした。

与那国島を含めて八重山地方全体の伝統的稲作が、日本の稲作の南下したものか、あるいは熱帯の島嶼を北上して南方から渡来したものかはまだ明らかでない。すでに与那国島の在来イネや八重山、沖縄の多くの在来イネが途絶えているので、イネ品種の類縁関係からこの「稲作の系譜」を明らかにするのは困難なように思える。また、稲作の個別技術についても、時を経るにつれてその記憶をつなぎ止めておくことが困難となろう。与那国島を一例とした本稿が、そのような意味で、南西諸島の「稲作の系譜」を辿るためのひとつの情況証拠を提示しえているならば、本稿の目的は半ば達せられたといえよう。

参 考 文 献

- 安溪遊地. 1978. 「西表島の稲作：自然・ヒト・イネ——伝統的生業とその変容をめぐって——」『季刊人類学』9 (3) : 27-106.
- 古川久雄. 1982. 「ルソン島の陸稲栽培とその環境——事例調査——」『農耕の技術』5 : 53-72.
- 伊波普猷. 1927. 「朝鮮人の漂流記に現れた尙眞王即位當時の南島」『史学雑誌』38(12) : 44-84.
- 小林 茂. 1982. 「奄美諸島の伝統的家畜飼養(二)」『歴史学・地理学年報』(九大教養部) 6 : 51-86.
- 国分直一. 1970. 『日本民族文化の研究』東京：慶友社.
- 岡 彦一. 1953. 「稲品種間の各種形質の変異とその組合せ——栽培稲の系統発生的分化第1報——」『育種学雑誌』3 (2) : 33-43.
- 下田博之；細矢伸之；本山金七；黒川善雄. 1979. 「南西諸島の在来犁に関する調査研究」『東京農工大学農学部農場研究報告』9 : 51-80.
- 田中耕司；古川久雄. 1982. 「踏耕の系譜」『南西諸島農耕における南方的要素』文部省科学研究費一般研究(B)「日本農耕のオーストロネシア的要素」報告書, 23-51ページ所収.
- 山田 裕；本村 悟；松坂泰明；加藤好武. 1973. 「石垣島、宮古島および与那国島の農耕地の土壌調査と分類」『農業技術研究所報告B』24 : 265-365.